

## コロナ自粛の大罪



鳥集徹著  
宝島社新書  
990円(税込)

コロナ報道でメディアに登場する医師たちは、危機感をあおり「医療ひっ迫」を訴える。感染症の専門家と称し、政府や自治体と一体となり、一方通行の情報を浴びせる。「あの大政翼賛会の時代と変わらない」（本書「まえがき」）。



そこへ、本書は「大罪」と断じて反論を繰り広げる。医療ジャーナリストの著者が7人の医師に個別にインタビュースし、大罪の中味を問いただす。時流に逆らう「7人の侍」を登場させた画期的な出版である。

共著者でもある医師た

ちは、森田洋之、萬田緑平、長尾和宏、和田秀樹、本間真二郎、高橋泰、木村盛世の諸氏である。それぞれの専門知識や現場体験からコロナ感染の実情を分析し、その結果導き出した対策をきちんと提言する。うち、森田、萬田、長尾さんは診療所を持ち、訪問診療に積極的だ。

例えば、診療所の外にテントを設けた長尾さん。「CTで肺炎の影があつて、症状からコロナと診断したらデキサメタゾンを注射している」と診察を語り「町医者活用の訴える。その体験から「2類相当の感染症から5類相当に変えるべき。保健所の一元管理をやめて」という提言につながる。インフルエンザ並みの対応で十分ということ、まことにもっともな考えだ。

専門家たちが死の現場

# 医師たちが解く「騒ぎ過ぎ」

を知らないことも浮き彫りになった。終末期の高齢者には、人工呼吸器や過剰な点滴、エクモなどを止めてきたのに、コロナでは延命治療に向かう。萬田さんと和田さんが異口同音に指摘している。「老年医学会の主張と逆だ」（和田さん）とも断じる。

過度の自粛によって赤ん坊や子供たちの免疫力が落ちることを恐れるのは本間さん。「細菌やウイルスを取り込んで免疫系を育てていくのが人間の成長なのに」と嘆く。

厚労所の医系技官でもあった木村さんは、医師や厚労省の努力不足を追求。「（日本医師会の）中川俊男会長が理事長の新さっぽろ脳神経外科病院だって、新型コロナ患者を引き受けてないですから」と、痛いところを突く。

これらのインタビュースは1月中に行われた。4月以降の変異ウイルスによる第4波感染の前だ。その点を留意すべきだが、ウイルスへの向き合い方に大差はない。日本型医療の特異性もよく分かり、今後の改革の方向性も学べる。